

『ハムレット』における考察
A Study of *Hamlet*

井上 泰
INOUE Hiroshi

This paper is the study of *Hamlet*. Firstly, it is my impression of my careful reading and reading aloud of selected scenes from *Hamlet*. Secondly, it is my study, which is based on the famous phrases of Hamlet's character and the Shakespearean intention of Hamlet's character.

まず原文で『ハムレット』の名場面を精読・朗読した感想を具体的に述べる。

『ハムレット』の名場面の中でも一番有名な部分はハムレットの第三独白である。そして、私もその部分が一番印象深い。その部分を引用する。

To be, or not to be, that is the question:
Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take arms against a sea of troubles
And by opposing end them. To die to sleep,
No more; and by a sleep to say we end
The heart-ache and the thousand natural shocks
That flesh is heir to: 'tis a consummation
Devoutly to be wish'd. To die, to sleep;
To sleep, perchance to dream ay, there's the rub:
For in that sleep of death what dreams may come,
When we have shuffled off this mortal coil,
Must give us pause there's the respect

That makes calamity of so long life.¹

(生か、死か、それが疑問だ、どちらが男らしい生きかたか、じっと身を伏せ、不法な運命の矢弾を堪え忍ぶのと、それとも剣をとって、押しよせる苦難に立ち向い、とどめを刺すまであとには引かぬのと、一体どちらか。いっそ死んでしまったほうが。死は眠りにすぎぬ それだけのことでないか。眠りに落ちれば、その瞬間、一切が消えてなくなる、胸を痛める憂いも、肉体につきまとう数々の苦しみも。願ってもないさいわいというもの。死んで、眠って、ただそれだけなら！ 眠って、いや、眠れば、夢も見よう。それがいやだ。この生の形骸から脱して、永遠の眠りについて、ああ、それからどんな夢に悩まされるか、誰もそれを思うと いつまでも執着が残る、こんなみじめな人生にも。) ²

このハムレットの独白を読んでいるとハムレットの深い苦悩が伝わってくる。そして、ハムレットには詩的センスも備わっていることがよく分かる。この独白はハムレットが自分の深い苦悩を詩的に歌いあげたものであろう。もちろん、作者であるシェイクスピアがハムレットにこの独白を歌わせているのであるが、このように自分の苦悩を歌いあげることができるということはすごい複雑な頭脳をハムレットは持っているのであろう。

私はこの独白の中で、“**To be, or not to be, that is the question;**” と “**To die to sleep, No more;**” のところが詩的なバランスで対になっているように感じられる。そして、この部分を朗読してみると、自然に心が静まる。このセリフはハムレットにとっては深い苦悩であるのだが、あまりにも詩的側面が崇高であるため、朗読している人に一種の安らぎのようなものを与えると思う。悲しい詩でも美しい詩を読むと人は心が安らぐものである。その詩が人に与える安らぎの作用がこのセリフにも宿っているように思う。

私が二番目に印象的なのが次の部分である。

We defy augury. There's a special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come. The readiness is all.³

(前兆などというものを気にかける事はない。一羽の雀が落ちるのも神の摂理。来るべきものは、いま来なくとも、いずれは来る　いま来れば、あとには来ない
あとに来なければ、いま来ただけのこと　肝腎なのは覚悟だ。) 4

このハムレットのセリフはまるで禅問答のようなものに思える。しかし、このセリフからはもはや、ハムレットの迷いは感じられない。いわば、ハムレットはこの禅問答のようなセリフを吐いたことにより、自分の中に溜まっていた迷いをすべて吐き出してしまったのかもしれない。

私はこのセリフを朗読してみると、気分が心地よくなる。セリフがすっきりしていて、それでいてテンポがよいからである。特に、“If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come,”の部分が実にテンポがよい。シェイクスピアはこのようなテンポがよいセリフをハムレットに言わせることによって、この『ハムレット』の劇を観ている観客にも、この劇が一つの転換点を通り過ぎたことを理解させようとしたのかもしれない。

私はこの『ハムレット』の名場面を精読・朗読してみても一番感じたことは、やはりシェイクスピアの詩的センスの卓越性であった。シェイクスピアほど言葉を巧みに操った劇作家は、今まで現れていないように思う。そういう意味で、あらためてシェイクスピアの偉大さが感じられた。

次に『ハムレット』の中の名句を基に、ハムレットの性格と作者の意図を論ずる。まず、ハムレットの第一独白をみってみる。

O that this too too sullied flesh would melt,
Thaw and resolve itself into a dew,
Or that the Everlasting had not fix'd
His canon 'gainst self-slaughter. O God! God!
How weary, stale, flat, and unprofitable
Seem to me all the uses of this world!
Fie on't, ah fie, 'tis an unweeded garden
That grows to seed; things rank and gross in nature

Possess it merely.⁵

(ああ、この穢らわしい体、どろどろに溶けて露になってしまえばよいのに。せめて、自殺を大罪とする神の掟さえなければ。ああ、どうしたらいいのだ、この世の営みいっさいが、つくづく厭になった。わずらわしい、味気ない、すべてかいなしだ！ええい、どうともなれ。庭は荒れ放題、はびこる雑草が実を結び、あたり一面、むかつくような悪臭。) ⁶

この独白から、ハムレットのものすごい厭世観が感じられる。いっさいの物事が彼をイラつかせているのであろう。これは仕方のないことのように私は思う。父が死に、母は二月も経たぬうちに叔父のクローディアスと結婚してしまったのでは、悲しみがあふれてくるのも当然である。それも、ハムレットはクローディアスを忌み嫌っているのである。これではハムレットが精神的に不安定になるのも無理はない。

ここでハムレットの性格を描写している次の文章を引用する。

さらに重要なことは、元来、彼は、一つの「現実の問題」に具体的に対処して行く行動人ではなく、あらゆる問題に活発な関心を持ち、自分をも含めて、それらを鋭く批判せねばおれぬ、すぐれた知性に恵まれてはいるけれど、とかく、何事をも一般化し、抽象化せねばおれぬ、純理的思考 (speculative mind) の持主であることである。

7

もともと、このような性格であったハムレットに上記したような悲劇的なことが舞い込んできたのであるから、普通の行動がとれなくなっても仕方がないように思う。

私は、シェイクスピアはハムレットを詩的な人物に造り上げようとしたように思う。今まで上演された劇の中でハムレット以上に詩的なセリフを述べる人物はいないのではないだろうか。このハムレットの「抽象化せねばおれぬ、純理的思考 (speculative mind) の持主である」という性格が詩的な言葉を生み出すという役柄にぴったりであるのかもしれない。ハムレットのように、ただ単純な思考が一つの詩になっているような人物がもし私の側にいたら、少なからぬ驚異を覚えるかもしれない。しかし、『ハムレット』という劇のなかで、ハムレットが発するセリフを聞くと、私に何らかの啓示を与えているような気が

する。

ここで次の文章を引用する。

少なくとも、彼は一つの「考え方」には達している。「浄化」という。しかし「事実」を離れた抽象思考では、何ものも解決し得ないということ。一つ一つの「事実」を見究め、それに素直に対処し、それを積み重ねて行く以外に途のないことを。これこそ「われ、何をか知る」(Que sais je?)と言ったモンテニユの出発点ではなかったか。そしてそれはまた、シェイクスピアが、この時期を通過していたことを語っているのではないか。⁸

私は『ハムレット』を読み、この「浄化」ということを考えさせられた。それはきっとハムレットが発する詩的なセリフが私の心に深く響いたからであると思う。

註

- ¹ Edited by Harold Jenkins The Arden Shakespeare "*Hamlet*" Second Series 1982 (以下"*Hamlet*") pp.277-279 (3.1.56 3.1.69)
- ² シェイクスピア著 福田恆存訳 『ハムレット』 新潮社 1967年(以下『ハムレット』) pp.84-85
- ³ "*Hamlet*" p.407(5.2.215 5.2.218) (本のと通りの改行で掲載)
- ⁴ 『ハムレット』 pp.185-186
- ⁵ "*Hamlet*" pp.187-188(5.2.129 5.2.137)
- ⁶ 『ハムレット』 p.22
- ⁷ 和田勇一著 『シェイクスピア作品研究』 英宝社 1978年 p.146
- ⁸ 同上 pp.170-171

参考文献

福田陸太郎・菊川倫子著 『シェイクスピア・人と思想』 清水書院 1988年

ヤン・コット著 蜂谷昭雄・喜志哲雄訳 『シェイクスピアはわれらの同時代人』 白水社 1992年 (Jan
Kott, *Shakespeare Our Contemporary*, 1964)

中西信太郎著 『シェイクスピアの世界』 英宝社 1967年

石川実著 『シェイクスピア四大悲劇』 慶應通信株式会社 1989年

河合隼雄・松岡和子著 『快読シェイクスピア』 新潮社 1999年